

第九回

なぜ、アジ研図書館に通うのか？

末廣 昭

私は一九七六年から八七年三月まで一一年間、まだ市ヶ谷時代のアジ研調査研究部（タイ担当）に籍を置いていました。その後、アジア経済研究所（以下、アジ研）を離れ、大阪市立大学、東京大学と職場を変えてきましたが、アジ研の研究会や開発スクールに関与してきた関係で、図書館には昔同様お世話になっています。

私がアジ研図書館に通い続けている最大の理由は、世界でも稀なほど充実している統計資料を閲覧するためです。私個人のタイ研究に必要ということもありますが、一九九七年アジア通貨危機前にアジ研内で立ち上げた「タイ総合研究会」、一橋大学経済研究所が中心となって推進してきた「アジア長期経済統計研究会」、私自身が研究代表者になっている科研費を利用した「東アジアの社会保障制度比較研究会」など、一連のプロジェクトを遂行するうえで、アジ研図書館が所蔵する膨大な統計刊行物が必要不可欠のリソースになっているからです。

二〇〇〇年代に入って、東アジアの多くの政府は、従来ハードコピーで刊行してきた統計刊行物の内容の一部を、ネット上で公開するようになりました。また、主要経済統計の多くは、各国の統計局や中央銀行などが、リアルタイムでネット上にアップロードしています。また、私が所属する東京大学でも、東アジアの統計刊行物がある程度収集しています。にもかかわらず

ず、私がアジ研図書館に通い続けるのには、ネットでは得られないとても重要な利点があるからです。

例えば、タイの労働市場の現状を知りたいと思ったとしましょう。ネット上には年四回（昔は年三回）の「労働力調査」の過去一〇年分の要約データが掲載されています。タイの国内経済格差の状況や貯蓄・負債の状況を知りたいと思えば、「家計社会経済調査」（概ね二年に一回）の内容を、ネット上で利用することができま

す。ところが、こうしたデータには、統計サンプルに関する説明や利用にあたっての注意事項、統計局の分析結果は含まれていません。また、カバーしている時期も直近か、概ね過去一〇年以内に限られています。研究者自身がデータベースを構築するためには、どうしても現物にあたる必要があるのです。

加えて、ネット上に掲載されている統計類は汎用性の高いものばかりです。例えば、タイの労働市場と労使関係を知るために必要不可欠の『タイ労働保護・福祉統計年鑑』は、タイ語で作成されているために、アップロードされていません。逆に、最近のシンガポールは、『統計年鑑』のハードコピーを経費節約のために簡略なものに変更し、データのフル提供はネット上のサービスに転換してしまいました。しかし、利用できるのは最新版だけであり、過去に遡っ

てみることはできません。結局はハードコピーに頼るしかないのです。

ところが、東京大学の図書館が所蔵しているタイやシンガポールの統計年鑑の場合、欠番が結構あります。これがインドネシア、ベトナムなどになると、ほぼ絶望的です。私が研究代表者を務めている科研費「東アジアの雇用保障と新しいリスクへの対応」では、現在、東アジア一〇カ国・地域の人口動態、労働市場・雇用関係、経済格差、社会保障関係などのデータ集（二〇〇〇ページ以上）を、東京大学社会科学研究所のHP上で公開しています。その情報源は、メンバーが現地で収集した資料を別とすれば、私自身がアジ研図書館にせつせと通ってコピーするか、その場でパソコンに入力したものでした。恐らく、過去六〇年間にわたる東アジア統計類をまとまって見ることでできる図書館は、日本どころか、現地の大学や研究機関に行ってもありません。

ネット上での経済統計類の公開が進み（同時に時期が来れば消去され）、他方でハードコピーの定期刊行物の出版が尻すばみになっていくなかで、過去の蓄積を含めて後世に継続的な資料を残すことができる研究機関は、日本ではアジ研図書館しかないと確信します。膨大な費用、エネルギー、気配りが必要なこの骨の折れる作業を、ぜひともアジ研図書館の職員には、誇りをもって続けていって頂きたいと思っています。

（すえひろ あきら／東京大学社会科学研究所教授。元アジア政経学会理事長。）